様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月　８ 日現在

機関番号：１４３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2021
課題番号：１８Ｋ００００６１

研究課題名（和文）漢訳仏典の受容後に生じた漢語ベースの思考法の解明：中国仏教の漢字術語の重層性

研究課題名（英文）Examination of the Chinese-based way of thinking after Chinese adoption of Buddhism: Multi-layered characteristics of Chinese Buddhist terms

研究代表者
船山　徹（Funayama, Toru）

京都大学・人文科学研究所・教授

研究者番号：７０２０９１５４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：　5-11世紀中国仏教思想史の根幹的な発展に関わる仏教漢語に着目し，漢語特有の仏教語の語義解釈を検討した。中国の仏教徒は，インド語本来の語義と中国的語義解釈法を用いる重層的解釈を打ち立てた。インド文化にはサンスクリット文法に基づく語義解釈と，「ニルクティ」「ニルクタ」「ニルヴァチャナ」という通俗的語義解釈とが共存した。一方，中国には，仏教伝来以前から存在していたた儒学・史学の漢字文献において，漢語を逐語的に解釈する伝統が存在し，「同音の漢字は意味を共有する」解釈した。
　最終成果報告書として船山徹『仏教漢語 語義解釈：漢字で深める仏教理解』（2022年3月）を出版し，研究意義を公開した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　従来、漢字で表す仏教語の解説研究には一つの共通点があった：漢字仏教語を扱いながら、解説自体はそのインド語（主にサンスクリット語とパーリ語）における対応原語を示し、インド語の意味をインド語として解説することに終始し、見出し語で示した漢字の意味を全く説明しなかった。これは「説明しなかった」というより、知識不足によって「説明できなかった」と言う方が真実に近い。本研究はこのような「似非」解説を批判し、漢字による仏教用語を、サンスクリット語解釈の伝統ではこう説明し、漢語の伝統解釈ではこう説明すると区別して論じ、インドと中国の伝統的解釈には共通面も全くの相違面もあることを基本語約50語に即して実証した。

研究成果の概要（英文）：　The present research pays a special focus on the Chinese Buddhist terms during the 5th-11th centuries as closely related to the development of Chinese thought. Chinese Buddhists established a multi-layered interpretation of Buddhist terms based on both Indic exegesis in Sanskrit and Pali and the Chinese traditional interpretations of words as found in Confucian classics. Indic exegesis means the Sanskrit Panininian grammar and folk etymology often called nirukti, nirukta or nirvacana. Chinese traditional exegesis is, on the other hand, deeply related to the way of interpretation that Chinese words of the same/similar phoneme can means the same notion (yintong).
　The final report of this research project has been published as a monograph entitled "Bukkyo kango Gogi kaishaku: kanji de fukameru Bukkyo rikai" in March, 2022.

研究分野：仏教学

キーワード：仏教漢語　通俗的語義解釈　音通　サンスクリット語　folk etymology　nirukta　nirukti　nirvacana

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景　私はインドのサンスクリット語の仏教認識論から研究を始め，1988 年以降は隋唐以前の中国仏教史にも領域を拡げた。2000 年から中国仏教史をインド仏教と対比する「中印交渉史研 Sino-Indian studies」の視点を表に打ち出し，インドから中国に仏教が伝播した際に継承された面と独自の展開を遂げた面の両面から研究する方法に着手した。この流れの中で，私が本研究の重要さをはっきり自覚したのは，2014 年 1-3 月，スタンフォード大学宗教学部客員教授として大学院授業を担当した折，英語による「真如（zhenru しんにょ）：仏教語解釈の中国化」という公開講演の準備をしていた時であった。漢語「真如」とそのインド語原語を精査した結果，漢訳語の形成と意味についてこれまで判明していることが余りにも少ない事実に気づき驚いた。そしてこれを機に，使用言語と思考方法の相関関係を意識敵に考慮するようになった。

本研究は，前近代中国の仏教において使用された古典漢語と思考法の間に見られる密接な相関関係の将来的解明を，インド中国双方の学術的背景を明確に意識しながら遂行した。世界宗教である仏教は，民族宗教と異なり，文化や言語の壁を越えて伝播し，インド的原型を留めつつ，伝播先の文化に応じた変貌を遂げた。仏教が聖典の翻訳を推奨したことで，中国仏教は大量の漢訳仏典を産出し，漢語で思考し表現する独自性と，時には思想的歪曲をも示した。私は 2013 年，単著『仏典はどう漢訳されたのか：スートラが経典となるとき』（岩波書店）を上梓し，中国仏教が最初期から現代まで漢語のみを言語基盤としたこと，つまり，仏典が漢訳された瞬間から“漢語ベースの思考法”が始まっていたことの特性を，一次資料に即して解説した。この単著が漢訳という“外来文化の入り口”に関する研究であったのに対し，本研究は仏教輸入後の解釈の結果と熟成・中国的特性を焦点とし，解釈の中国的歪曲にも留意した。本研究は，漢語のみを用いて思考して仏教を理解しようとした中国仏教徒は，どのように説明したかという“漢訳仏典の受容後に生じた漢語ベースの思考法”を思想史的に解明する新たな視点を示す。

２．研究の目的　本研究の目的は二つある。広義には，抽象的思考を行う際に使用する言語の担う役割を解明することである。より限定的な，狭義の目的は，言語と思考の相関的関係を中国仏教思想の中核となる仏教基本漢語に即して文献学的に解明することである。

より具体的に言えば，本研究で扱う核心的問いとして次の二つを設定した。一は，漢語文化圏のような，ある成熟した文化圏で使用される言語は，その人々の「ものの考え方」（思考法・思考傾向・思考形態）とどう関係し，どう影響したか。二は，インドに端を発した仏教が民族と国境を越えて中国に伝来して所謂「仏教の中国化」（中国的変容と発展）を遂げた際に，仏教の抽象的な概念・思想を表す仏教語はどのような形で「中国化」を示したか。この二つの問いに答えるべく，本研究では，インドと中国の両文化にそれぞれ二つの語義解釈の伝統を認め，一次資料に即してそれを具体的に論じた。インドにおける二つの語義解釈とは，パーニニ文法に基づく正規文法に叶った語義解釈と語の同音性や発音類似性に基づく通俗語義解釈（ニルクタ）とである。中国における二つの語義解釈とは，漢字一字ずつの辞書的解釈と，音通と呼ばれる同音性・類音性によって他の漢字に置き換えて説明する方法とである。これら合計四種の解釈を一つの術語に適用したとき，インドから中国に継承された解釈の連続性と共に，インドと中国とではっきりと異なる解釈の断絶性とがあることを具体的に例証することを，本研究は目的として定めた。

３．研究の方法　本研究で解明を企図するのは，仏教における基本語の意味とその振幅ないし揺らぎを，インド仏教のサンスクリット語やパーリ語の原典の文脈で解明するのではなく，仏典の漢訳者たちが工夫して新たに捜索した漢語の意味として，漢語で思考する際に特徴となる仏教思想の基本単位を漢語ベース

で詳しく理解することである。本研究で使用とする仏教語は，辞書に載録される仏教語の全てではない。あくまで中国仏教特有の思考法や学術的伝統を知るのに不可欠な基本語およそ 50 語に調査対象を限定した。その一々は，中国日本の仏教史において数百年～千年以上の長期に用いられ，かつ意味や訳語に推移の歴史が認められる点で思想史的価値が高い。基本語の資料蒐集といっても電子資料を語彙検索すればよいという安直なレベルでは何も解決しない。基本語であるが故に検索結果は厖大な数に及ぶ。それらを体系的に整理するには，原文資料をこつこつと精読して意味と文脈を理解する以外に方法はない。これは安直な語彙検索では得られない解釈の内実に迫ることである。最新のツールを駆使して機械ではなし得ない次元に研究を深めることにつとめた。

特に頻繁に検討する対象は，仏教文献の場合，訳経僧の鳩摩羅什（くまらじゅう）による語義解釈，南朝梁の『大般涅槃経（だいはつねはんぎょう）』注釈，隋の慧遠（えおん）・智顗（ちぎ）・吉蔵（きちぞう）の注釈や綱要書，唐の窺基（きき）・義浄（ぎじょう）・法蔵（ほうぞう）・澄観（ちょうかん）・宗密（しゅうみつ）らの諸注釈，北宋の子璿（しせん）による解説などであった。これらは特定の学派や系譜という枠を越えて，広範にして通時的な原典解釈を要する。

一方，非仏教文献として意図的に取り上げた原典資料は，後漢の『説文解字』を初めとする字書と，『釈名』を初めとする訓詁書，儒学経典と道家文献（『老子』『荘子』等）ならびにそれらに対する注釈であった。これら梵語原典と漢語原典の両方に注目することによって，インドと中国の語義解釈に著しい違いが見られることを示す具体例を示すこともできたが，他方，直接的には関係をもたないはずのインド語文化圏の梵語に基づく語義解釈と漢語文化圏の漢字熟語の語義解釈が奇しくも，そして見事なほどに一致する例を見出すことにも成功した。

４．研究成果　5-11 世紀中国仏教思想史の根幹的な発展に関わる仏教漢語（漢字仏教語）に着目し，古典漢語・サンスクリット語・チベット語の一次資料の分析により，漢語特有の仏教語の語義解釈を検討した。仏典漢訳語彙研究は，外来文化の入り口の研究であるに対し，本研究は、訳語を漢語として理解し解釈するという結果の研究である。

中国の仏教徒は，インド語本来の語義に加え，仏教伝来以前から存在した儒学や歴史学に基づく漢語特有の中国的語義解釈法を用いる重層的解釈を打ち立てた。インド文化にはサンスクリット語パーニニ文法に基づく正統的語義解釈と，「ニルクティ」「ニルクタ」「ニルヴァチャナ」（意味は同じ）という通俗的語義解釈とが共存し，両方が中国に伝わった。一方，中国には，仏教伝来以前から存在していたた儒学・史学の漢字文献において，漢語を逐語的に解釈する伝統が存在し，「同音の漢字は意味を共有する」という「音通」による解釈法を駆使する独自の解釈があった。仏教漢語解釈は，インド・中国の融合的解釈として結実した。漢語原典資料として古典諸注釈のほか，訓詁書『釈名』に着目した。

最終成果報告書として船山徹『仏教漢語 語義解釈：漢字で深める仏教理解』（2022年3月）を出版し，研究意義を公開した。報告書の構成は次の通りである。

序論「インド伝来の仏教を漢字で思考し言い表す」

第１章「一字でも解釈は様々：原義と音通」――検討語「法」「経」「契経」「道」「忍」「心」「聖」。

第２章「仏典漢訳から生まれた新漢字」――検討語「鉢」「応器」「魔」「塔」「梵」「梵書」「刹」「唄」。

第３章「仏典が作り出した術語」――検討語は「衆生」「有情」「如如」「真如」「五陰」「五蘊」。

第４章「漢字の妙味：熟語の分解と再統合」――検討語「孤独」「歓喜」「如是」「讃歎」「如来」「世尊」「方便」「煩悩」。

第５章「インドの解釈を引き継ぐ漢字音写語」――検討語「沙門」「比丘」「阿羅漢」「那羅迦」「達嚫」

第６章「梵漢双挙：原語音写と漢訳の併記」――検討語「鉢盂」「偈頌」「禅定」「三昧正受」。

第７章「インド文化からの逸脱と誤解」――検討語「大乗」「仏説」「懺悔」「悉檀」「曇無竭」「偈（誤解）」漢語注釈者の偽梵語，『至元法宝勘同総録』の偽梵語。

第８章「仏教漢語の特徴」――検討語仏教新漢字と「可口可楽」の異同。

付録「サンスクリット複合語の分類を示す漢語」。

この成果報告書で取り上げた具体的仏教漢語は僅か50語ほどだが，全て根幹と関わる基本要語である。

上記「３．研究の方法」の末尾で私は「直接的には関係をもたないはずのインド語文化圏の梵語に基づく語義解釈と漢語文化圏の漢字熟語の語義解釈が奇しくも，そして見事なほどに一致する例を見出すことにも成功した」と述べた。その端的な例は，第５章で取り上げた「孤独」である。孤独を一つの概念と見なさないで「孤」と「独」に分解しそれぞれに異なる意味を付与するという語義解釈は，中国仏教文献の吉蔵『勝鬘宝窟』に顕著であるが，全く同じ解説が，吉蔵に先行する儒学の経典『礼記』王制と『孟子』梁恵王下篇の語釈と軌を一にすることを突き止めた。

一方，ある意味で当然だが，インドのサンスクリット語を漢字で音写しただけの所謂「音訳」には中国特有の発展的解釈よりインド伝統解釈を保守する傾向が強く，仏典の漢字音写語は日本語のカタカナ表記と同じく音を表すのみで漢字の意味と直接は無関係であるのに対して，時に漢字の意味を無理に読み込み甚だしい誤解をした者もいたことを示した。端的にはブッダの漢字音写語として最適なのは「仏図」であり，「仏陀」でも「浮屠」でもないという釈僧順の説である。

「「仏教漢語の語義解釈」形成過程」と名付けた概念図（13 頁）に示した通り，仏教漢語は二つの側面を共に備えている。一つは，インド語による仏教語解釈の成立と思想史的展開という「伝統的インド語解釈」の側面である。もう一つは，それを「漢訳」を通じて受け止めた中国人仏教徒が，中国伝統の古典語解釈を文化的背景として，それとうまく折り合いをつけながら形成した，中国独自の「伝統的漢語解釈」という側面である。この両面は一方のみが強く現れることもあったが，両面が融合することで中国仏教独自の語義解釈に繋がったこともかなりの重要度で認められる。

このうち「伝統的インド語解釈」が表面に大きく掲げられた事例を，本書では第五章と第六章で取り上げた。この二章に共通するのは，漢字音写語である。音写語はインドの原語に即して理解するため「伝統的インド語解釈」が強く，「伝統的漢語解釈」は主とならなかった。

それに対して「伝統的漢語解釈」が表面化した典型的事例は第四章の「孤独」であった。仏教注釈者たちは「孤独」を，「孤」と「独」に区別して解説した後，個別化した意味を共に備えた「孤独」という熟語として再統合することを試みた。この方法は『礼記』や『孟子』に見られる「孤」と「独」の区別と全く同一手法であることが判明した。年代差を考慮すれば，仏教の注釈法は「伝統的漢語解釈」を仏教に応用した結果と見なければならない。これは「伝統的インド語解釈」が背後に隠れ，「伝統的漢語解釈」が表に顕れた好例である。要するに仏教は中国伝統文化を否定することなく，積極的にそれを受け入れることで仏教の語義解釈を実現した。

このように，「伝統的インド語解釈」を主に示す語意と「伝統的漢語解釈」を主に示す語意の両方を受ける形で，「伝統的インド語解釈と伝統的漢語解釈の融合」を示す語義解釈が生まれた。その具体的事例は本書の各処に見られる。第一章の「経」は「スートラ」の原義「一つに束ねる紐」を基にしてほぼ対応する漢語「経（＝縦）」を訳語に選び，それに加えて，「伝統的漢語解釈」を承けた結果として「経」を「常」と解することで「経典（スートラ）とは，恒常不変の真理を示すブッダの教えを記す書である」という新解釈を中国仏教にもたらした。「道」は中国道家の道に仏教の修行と悟りを重ね合わせ，「道とは菩提なり」というインド中国の文化融合を示した。第三章では「真如」という仏教漢語がインド語の直訳でなく，道

家思想に端を発する「真」字を用い――この瞬間に既に仏教の中国化が始まっている――,「真」と「如」の関係を様々に語義解釈する注釈が次々と編まれたことを具体的資料によって描写した。

総じて言えば，漢語仏典における「伝統的インド語解釈と伝統的漢語解釈の融合」とは，サンスクリット語の文法的解釈と通俗的語義解釈（ニルクタ・ニルクティ・ニルヴァチャナ）を元来の基盤とし，それに加えて，インド語が漢語に訳されて「漢語として成立」したことから仏教語を専ら漢語で解釈し思考する動きが生まれた。そうした中でとインドから伝わった仏教語の意味を「伝統的漢語解釈」とすりあわせ，融合を模索し，時には新たな解釈すら生んだ。

仏教は世界宗教としてインド文化圏を越えた他の言語に翻訳し他の言語で言い表すことを許容した。そのことが漢訳仏典を聖典と見なす根拠となった。それと同時に，中国人仏教徒はインド語を一切学ぶことなく，サンスクリット語原典を漢訳の横に並べて比べて読むという行為も一切行わず，ひたすら漢訳の枠内で仏典を読み，語義と思想を解釈した。漢語を通じてのみ仏教思想を理解する窓が開かれたのだ。それは仏典の世界的普及の第一歩であったが，それと共に，漢語ならではの思考で仏教思想を語る始まりとなり，また漢語に特有の曲解や漢語なしにはあり得ない解釈の仕方を実現してみせる「仏教の中国化 Sinification of Buddhism」を現実化した。漢語の仏書はそうした両刃の剣であることを我々はしかと受け止めるべきである。「仏典の中国化」は，インド語原典を漢語に翻訳した瞬間から始まった。それは始まり・導入・入口の話である。その後，東アジアの人々特に漢人は，仏典を漢語で読み，漢語で理解し，仏教とは何かを漢語で思考することにより「仏典の中国化」は強まり，結果・実質を実らせた。

（１）４年間の研究全体を統括する成果最終報告書単行本

船山徹（単著）『仏教漢語 語義解釈：漢字で深める仏教理解』，京都大学，非売品，2022 年，総 372 頁。

（２）本研究に基づく事例研究

船山徹（単著）『婆藪槃豆伝：インド仏教思想家ヴァスバンドゥの伝記』，法藏館，2021 年，総 268 頁。

船山徹（単著）『菩薩として生きる』，シリーズ実践仏教１，臨川書店，2020 年，総 250 頁。

船山徹（単著）『仏教の聖者: 史実と願望の記録』，臨川書店，2019 年，総 242 頁。

船山徹（単著）『六朝隋唐仏教展開史』，法藏館，2019 年，総 519 頁。

（3）個別研究論文

船山徹（単著）「中国における『梵網経』と日本への影響：日本の重文写本『梵網経』二種」，『日本における梵網経と菩薩戒思想の問題」，公益財団法人仏教美術研究上野記念財団研究報告書 48，公益財団法人仏教美術研究上野記念財団，2022 年，pp. 1-9，査読無。

Funayama Toru（単著）, "The Genesis of **Svasamvitti-samvitti* Reconsidered," Mark Siderits et al. (eds.), *Buddhist Philosophy of Consciousness: Tradition and Dialogue*, Leinden/Boston: Brill, 2021, pp. 209-224, 査読有。

Funayama Toru（単著）, "Translation, Transcription, and What Else?: Some Basic Characteristics of Chinese Buddhist Translation as a Cultural Contact between India and China, with Special Reference to Sanskrit *ārya* and Chinese *sheng*," *Buddhism and the Dynamics of Transculturality,* edited by Birgit Kellner, Religion and Society 64, Berlin/New York: Mouton de Gruyter, 2019, pp. 85-100, 査読無。

船山徹（単著）「覚盛願経『梵網経』下巻初探」，律宗戒学院『覚盛上人御諱記念　唐招提寺の伝統と戒律』，法藏館，2019 年，pp. 211-230，査読無。

Funayama Toru（単著）, "The Study of Chinese Buddhist Thought in Japan: "Subcommentary" and Its Japanese and Chinese Equivalents," *Acta Asiatica: Bulletin of The Institute of Eastern Culture* 117, 2019, pp. 41-50，査読無。

Funayama Toru（単著）, "Xiao Ziliang." In *Brill's Encyclopedia of Buddhism, Vol. 2,* edited by Jonathan A. Silk et al., Leiden: Brill, 2019, pp. 791-794，査読有。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計7件（うち査読付論文　5件／うち国際共著　4件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 船山　徹	４．巻 95
２．論文標題 『出要律儀』佚文に見る梁代仏教の音写語	５．発行年 2020年
３．雑誌名 東方學報，京都	６．最初と最後の頁 522-402
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14989/261844	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Toru Funayama	４．巻 1
２．論文標題 The Genesis of *Svasamvitti-samvitti Reconsidered	５．発行年 2021年
３．雑誌名 Buddhist Philosophy of Consciousness: Tradition and Dialogue, edited by Mark Siderits, Ching Keng, and John Spackman	６．最初と最後の頁 209-224
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

１．著者名 船山徹	４．巻 2
２．論文標題 仏典の伝播と日本の経蔵	５．発行年 2020年
３．雑誌名 日本宗教史2 世界のなかの日本宗教	６．最初と最後の頁 146-168
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 船山徹	４．巻 94
２．論文標題 衆生から有情へ，そして再び衆生へ：サンスクリット語sattva漢訳史	５．発行年 2019年
３．雑誌名 東方學報，京都	６．最初と最後の頁 33-66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Funayama Toru	4．巻 64
2．論文標題 Translation, Transcription, and What Else? Some Basic Characteristics of Chinese Buddhist Translation as a Cultural Contact between India and China, with Special Reference to Sanskrit arya and Chinese sheng	5．発行年 2019年
3．雑誌名 Buddhism and the Dynamics of Transculturality . New Approaches, edited by Birgit Kellner; Religion and Society vol. 64	6．最初と最後の頁 85-100
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 Funayama Toru	4．巻 117
2．論文標題 The Study of Chinese Buddhist Thought in Japan: "Subcommentary" and Its Japanese and Chinese Equivalents	5．発行年 2019年
3．雑誌名 Acta Asiatica	6．最初と最後の頁 41-50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 Funayama Toru	4．巻 2
2．論文標題 Xiao Ziliang	5．発行年 2019年
3．雑誌名 Brill's Encyclopedia of Buddhism	6．最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

〔学会発表〕　計6件（うち招待講演　6件／うち国際学会　4件）

1．発表者名 Funayama Toru
2．発表標題 Jizang 吉藏 on the Sanskrit Title of the Guan wuliang shou jing 觀無量壽經
3．学会等名 Writing and Reading Chinese Buddhist Translations in Medieval China（招待講演）（国際学会）
4．発表年 2019年

１．発表者名 船山徹
２．発表標題 玄奘の往生願望と初地の意義
３．学会等名 大正大学綜合仏教研究所公開講座（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Funayama Toru
２．発表標題 Eliminating “Chinese-made Scriptures” from monastic libraries in medieval China, with a special focus on the Chinese Buddhist catalogues by Sengyou and Zhisheng
３．学会等名 Conference "Evolution of Scriptures, Formation of Canons" organized by University of Hamburg and University of Tsukuba（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Funayama Toru
２．発表標題 Detection and Elimination of 'Chinese-made Sutras' Mixed in Monastic Libraries and Catalogues during Medieval China
３．学会等名 International Conference "Evolution of Scriptures, Formation of Canons"（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 船山　徹
２．発表標題 訳語の適性 ――「衆生」から「有情」へ、そして再び「衆生」へ
３．学会等名 東方学会シンポジウム「近未来の東洋学・アジア研究―言葉の重みを受けとめ、いかにその壁を超えるか―」（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Funayama Toru
２．発表標題 Pedagogic Aspects of Xuanzang's Translation Work: How to Build up Young Scholar-monks Efficiently in Limited Time
３．学会等名 International Workshop with Young and Senior Scholars "Translating and Educating: the Transmission of Indian and Buddhist Texts and Thought"（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計5件

１．著者名 船山徹	４．発行年 2019年
２．出版社 法藏館	５．総ページ数 556
３．書名 六朝隋唐仏教展開史	

１．著者名 船山徹	４．発行年 2019年
２．出版社 臨川書店	５．総ページ数 242
３．書名 仏教の聖者：史実と願望の記録	

１．著者名 船山徹	４．発行年 2020年
２．出版社 臨川書店	５．総ページ数 250
３．書名 菩薩として生きる	

１．著者名 船山　徹	４．発行年 2022年
２．出版社 臨川書店	５．総ページ数 372
３．書名 仏教漢語　語義解釈：漢字で深める仏教理解	

１．著者名 船山徹	４．発行年 2021年
２．出版社 法蔵鑒	５．総ページ数 238
３．書名 婆藪槃豆伝：インド仏教思想家ヴァスバンドゥの伝記	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関